

第4章. デカルトの実践への共感と考動遍歴の成果

自分で決めたことを、自分で決めた方法論に従って実践するに際して、デカルトはある種の行動規範とも呼べるものを定めました。その意図は、「判断を保留せよ」との理性の命令に従っている間でも行為を停止することがないようにすることでした。それは、次の4項目から成っていました。

- 1) 自分の国の法律と慣習に従うこと
- 2) 自分の行動には、できるだけ確固として変らぬ決心を持ち、一旦それと決めた以上は、一貫して従うこと
- 3) 運命よりもむしろ自分に打ち克つように、世界の秩序よりも自分の欲望を変えるように、常に努めること
- 4) この世界で人々が携わっている様々な仕事を一通り見直して、最善のものを選び出すよう心掛けること

大学を卒業して製造業に属する企業に就職し、社会人としての人生を歩み始めた頃のぼくには、デカルトのような自律性などあるはずありません。従って、自分で決めたことを自分で決めた方法論に従って実践するなどといった考えは、全く別の世界のものだったと言ってもよいでしょう。

デカルトが自分に定めた行動規範に沿って、当時のぼくの在り方を振り返ってみますと次のようなことが言えます。

- ・自分の国の法律と慣習に従うことなど当り前のことで意識にも上っていなかった。
- ・関心があちこちへと彷徨い、自分の行動に確固たる決心など持てる状態にはなかった。但し、好奇心は強かった。
- ・傲慢にも自分の運命は自分で切り開けると錯覚しており、自己に打ち克つとか自分を変えるとかいうことには思いもよらなかった。

まさに、未熟者の典型のような有り様でした。

ぼくが、自己に打ち克つとか自分を変えるとかについて考え始めたのは、40歳を迎えようとしていた頃でした。30代前半の何時の頃からか、ぼくは自分の掲げていた「自由と科学的認識」の旗に少々の疑いを持ち始めていました。その辺りから、ぼくの考動の遍歴が始まったようです。

心理学者のユングによれば、人間は35歳あたりで精神に乱れを生じ、これを何らかの形で收拾して人生の後半に入っていくとのこと。この時期に人生を崩壊させてしまう人たちもいれば、今までとは違う自己に巡り会って新たな人生に踏み出す

人たちもおり、また、それまでと変わらぬ人生に復帰していく人たちもいるというのです。

ぼくの考動の遍歴は丁度この時期に起こったと受け止められます。文学書や哲学書を読み漁り、評論や小説を書く真似をし、文学賞に応募したりしたのはこの頃でした。今でもぼくに影響を残している、ユング、フッサール、メルロ＝ポンティ、レヴィ＝ストロース、河合隼雄、王陽明、老子、といった偉大な先賢たちの思想に親しんだのもこの頃でした。

ぼくは、この考動遍歴の前はかなり深く研究したものがありません。それは、マルクス主義です。多数のマルクスの著書を読み、マルクス主義を奉じる経済学者や思想家の著書も読み漁りました。雑誌もかなり読みました。マルクス主義の傘下にある人たちの活動にも触れました。こうして弁証法的唯物論や史的唯物論に対する理解を深めていったのです。

ぼくの哲学や思想が固まっていった、こうした過程の中で起こったのが考動遍歴です。その切っ掛けは文学とユングでした。特にユングの影響は強かったと思います。第3章の、ぼくの文明論はユングの心理学なくしては生まれてこなかったと思います。

史的唯物論に対する懐疑がぼくの中に生まれてきたのも、ユングの心理学の影響によるものでした。その懐疑を突き詰めていって到達したのが、次に述べる歴史論でした。それは、第3章の文明論に基づいて歴史を考えた結果でもありました。

第3章の文明論の中で、文明とは何かを明らかにしようと試みて、歴史という言葉を使った。だが、歴史という言葉は文明を説明するために存在している訳ではない。ここで歴史というものを明確に説明しておく必要がある。文明の流れの現在の到達点とも言える、西欧近代主義を語ろうとすれば、歴史という概念を抜きにはできないからだ。

私たちがこれまでに学んできた歴史とは文明を対象としていると、第3章で述べた。また、文明と野性とは外的具象化と内的沈澱とで構成される環の上で、相互転換を繰り返す弁証法的運動を行うとも述べた。

即ち、内部にある未分化なるもの、これが野性である。未分化なるものを知により分化していく過程が文明の発展である。外的に具象化された環境、即ち文明の環境の中で生きている人間の内部には、その環境の働きかけによって未分化なものが生成され、沈澱する。これが野性に変化を与える。

ここの処に歴史とは何かが見えてくる。即ち、文明と野性との相互転換という弁証法的運動において文明に着目し、文明の運動を表現するものが歴史なのである。

従って、歴史の裏側には野性の運動が隠れていると言うことができる。この弁証法的運動の場を現象空間と呼ぶことができる。歴史は、これを大きく包み込む現象空間の中に在る。

マルクス主義では、社会発展の法則が存在し、それが史的唯物論だと主張している。その主張は、内的沈澱を見ることができず外的具象化の生成物だけを見て、その変化の様相があたかも法則に従っている1本の流れのように見えた錯覚から生じたのだろう。マルクスがユングの業績を知る時代に生まれていたら、こんなことにはならなかっただろう。

レヴィ・ストロースとサルトルとが歴史について論争したことがある。軍配はレヴィ・ストロースに上がっていると見てよかろう。私の立場から見れば当然のことだ。サルトルは歴史を一本の流れとして捉えた。

いわゆる“未開人類”と西欧社会の人類とを歴史の同じ段階にあるものとして捉えることができなかつた。“未開人類”は将来、歴史の流れの中で西欧社会の人類と同種の文明を持つようになると考えていたようだ。

言い換えれば、西欧近代主義的な意味での歴史は西欧固有の現れ方をしているものであると受け止めることができなかつたのだ。“未開人類”の社会と西欧近代社会とは同一の構造を持っている部分があることに、レヴィ・ストロースが気付いたことがサルトルの歴史観を否定することになった。

「歴史なんて本当にあるの？」というような意味の問い掛けを、レヴィ・ストロースがサルトルに向かってしているのは、サルトル流に考える歴史など有りはしないということの表現であり、歴史を否定したわけではない。

“未開人類”も西欧社会の人類も、それぞれの持つ文明と野性との相互転換という弁証法的運動の中で生きているのである。そしていずれの人類も、人類という種が外的環境の中で生きていくために必要な最小限のプログラムを無意識の中に与えられて発生したのだ。レヴィ・ストロースの言うところの同一の構造は見いだされて当然なのだ。

あえて一言付け加えておこう。西欧社会の人類が歴史に働き掛けて主体的に生きており、“未開人類”が天然の（あえて自然のとは言わない）環境の中で受動的に生きているという捉え方は誤りである。

いずれの人類も、それぞれの相互転換という弁証法的運動の中で、自然に（ここはあえて自然にと言う）生きていると言うべきなのである。

40歳を前にした頃から10年くらいかかったのですが、未熟者が偉そうなこと、恐れ多いことを考えたものだと言いつつ今さらながら感じています。

デカルトが定めた4つの規範は、ぼくたち現代人にとっても十分に通用するものです。ここに繰り返します。

- 1) 自分の国の法律と慣習に従うこと
- 2) 自分の行動には、できるだけ確固として変らぬ決心を持ち、一旦それと決めた以上は、一貫して従うこと
- 3) 運命よりもむしろ自分に打ち克つように、世界の秩序よりも自分の欲望を変えるように、常に努めること
- 4) この世界で人々が携わっている様々な仕事を一通り見直して、最善のものを選び出すよう心掛けること

これは、社会規範を認め、自分の志と理念を堅持し、他者を変えようとするのではなく自分が変わろうとする心構えを持ち、他者の業績を素直に認める、というものである。デカルトは近代や現代の思想や哲学、科学には触れていませんし、その成果も知りません。しかし、この規範は現代においても、知的なるものの追究を行う者にとってはきわめて重要なものだと言えます。

ただし、この規範に関する彼の説明の中には、そのまま受け入れることが困難な部分も幾つかあります。説明不足だと思われる部分もありますし、当時と現代との知識環境の違いから生まれるものと思われる部分もあります。以下に、そういったところを拾い上げてみようと思います。

デカルトは、信じる思考の働きと、信じていると認識する働きとの間に違いがあることを察知し、人々の意見の実際を知るために、彼らの発言よりも行動を拠り所にしました。こうした態度は、後世にユングが究めた命題、「人間の行動は意識よりも無意識に支配される」を暗に察知していたのではないかと受け止められます。

彼は世界は常に変化していくものだと受け止めていましたから、自分が一旦、是として認めたことが、環境が変わることによって是とは言いがたくなった時、以前の自分の考えを変える自由を持ちたがっていました。その自由があれば理性に対する過ちを犯すことを避けられると考えていたのです。

このことは、理性を駆使しての演繹だけでは真理に到達できないことを示していると言えるでしょう。なぜならば、変化する世界を捉えることは、そして、変化した環境の中で今まで真理と受け止めていたことがそうではなさそうだと感じ取ることは、理性による思考のみでは不可能だからです。

自分の力の範囲内にあるものは自分の思想しかないと信じるように自分を習慣づけようと努力をし、全生涯をかけて自分の理性を培い、自ら課した方法に従って、できる限り真理の認識に前進していくことを続けていくのが一番良いと考えていたデカルトにとって、変化する世界と自分の理性とをつなぐものは何だったのでしょうか。それは知覚と働きかけの他には有り得ないと思うのですが。

また、あらゆる美德とともに私たちの手に入り得る他の全ての善も獲得するためには、できる限りよく判断すれば充分だ、ともデカルトは言っています。判断とは理性による演繹のみで成り立つはずはありません。やはりここでも、知覚と働きかけが必要であることが浮かび上がってきます。

1620年3月頃から始まり9年間にわたった旅の中で、デカルトは役者よりむしろ観客になることに努め、あちこちと巡り歩きました。このデカルトの行動には、理性を培うだけではなく、知覚を機能させると同時に、外部世界に働きかける彼の有り様が鮮明に見て取れます。

この旅の中で彼は、現象と直接向き合い、対象と交感し、自分が知覚した現象の集合が表現する意味を追求していたのだらうと想像できます。デカルトは、旅の中での思考と行動に合わせて色々な観察をし、多くの実験を集積することを心がけ、試行していたことも、こうした想像を裏付けていると言えそうです。

この旅の中での思考と行動が、ただ本を読んだり学識者と付き合うだけの研究よりもはるかに大きな成果を、彼にもたらしたであろうことは容易に想像できます。理性を培うのに加えて、知覚を機能させ、外部世界に働きかける、という行動がこうした実りを彼にもたらしたと言えるでしょう。

デカルトの合理主義的、演繹主義的哲学が生まれたのは、現象や対象との交感と「現象の集合が表現する意味を掴みにいく」という彼の知覚的思考が理性に加わったことによるのだと言えそうです。

デカルトは理性を人間存在の基本と位置付け、演繹的思考を重視して合理主義哲学を打ち立てました。彼の哲学を象徴していると言われる有名な言葉があります。「われおもう、ゆえにわれあり（ラテン語で、コギト エルゴ スム）」です。この言葉に関しては、以後の章で詳しく述べることとなりますが、次のことだけはここで取り上げておこうと思います。

この言葉に対して、現代の科学や現代思想の大家たちが異論を唱えています。この異論の中のデカルト批判と、デカルトがこの言葉で表現したかかったこととを並べて考察してみますと、次のようなことが浮かび上がってきます。

- ・現代の大家たちは、デカルトの後の著者やデカルト継承者たちの思想から、この言葉を心身二元論すなわち、心と身体とは別物として存在するという主張と捉え、現代の脳科学の成果から異論を唱えた。
- ・デカルトは「疑ったり判断したりしている自分は一体何者であり、それが自分であるとするならば、なぜ自分であるのか」という疑問に答えて、自分が自分であることの理由を明確に表現した。

このように受け止めますと、デカルトの言葉も現代の大家たちの異論も正しいのです。特に脳科学者ダマシオの研究は、デカルトの誤りを指摘しているというよりも、曖昧さを含むデカルトの考えを科学的に裏付けていると言ったほうが適切なように思います。

以上の通りの、デカルトの考えとそれへの異論との併置検討は、言葉だけを取り出してそれが正しいか否かを論ずるだけでは、思考の浅薄さを脱し切れないことを再確認させてくれました。

デカルト自身は、現象や対象との交感、そして現象の集合が表現する意味の追求、といった知覚的思考を実践しながら、なぜ演繹的思考を重視する合理主義哲学を主張することになったのでしょうか。この辺りを解き明かすことを頭に置いて、これからの話を進めていこうと思います。